

PRINCESS PRINCESS

●胸がキュッとした。本当に。プリンセス・プリンセスのこの日のライブは、「ウレシ涙」を呼び起こしてくれた。夢を現実の花開かせた5人の姿に感動を覚えた人は多い。歌の世界を本物に……。彼女たちはステージ上で、夢みることの素晴らしさと、貫く力強さを教えてくれた。

夕暮れ時の渋谷・公園通りを、ほとんどケンカ腰で「どいた！ どいた！」と駆け抜けければ、坂の上の公会堂は若者でゴック返している、はずだった……。

シーン。すでにダブ屋のオッサンも見当たらず。渋谷公園通り。マ・マズイ！ さっきまでの威勢はどこかに吹き飛んで、シュンとうなだれてしまった私。

4月17日、日曜日。日曜日！ そっか！ 開演6時だったのか。いつもの6時30分開演をはなから信じ切っていた愚かなわが身を嘆いても遅すぎる。気まずさで肩をすぼめながら、重いドアを開けると、ムッとするくらい暑かった。しかも、視界をシャットアウトする立ち見の人、人、人。公園通りの人垣をかき分けて来たときと同じ調子で、厚かましくも前へ、前へ進んだ。

悪いな。今日は特別な日なんだって。

プリンセス・プリンセスが渋谷公会堂のステージに立っているのをこの目で確かめたのだ。オッ、見えた、見えた。このポジションをキープするために、私は両脚を広げて、仁王立ちしていることにした。

この曲は「恋のペンディング」だ。つーことは、4曲目だな。前半にギリギリ間に合ったって寸法だけど、残念！ 「19 GROWING UP」も、「MY WILL」も、私が大好きな「WONDER CASTLE」も終わっちゃってる。読みが甘かった。よく知られている曲だから、きつと後半、もしくはアンコールに持ってくるんじゃないかと思っただけが甘かった。この満場一致の盛り上がりぶり。頭3曲のノリでもってこきえたに違いない。のっけから、シングル・ヒットをプチかまして煽るだけ煽ってやろうってわけだな？ 見たかったな。プリンセスの面々の突撃ぶりを。しかし、これから本当の正念場。プリンセスの乙女の純情&熱情が試される時だ。

「KEEP ON LOVIN' YOU」。経験済みの乙女の純情は、〈酸いも〉も〈甘いも〉も、さわやかな出発を奥居香、万感の想いを込めて歌い上げます——だなんて書きすぎだっけーの！ まあ、でも、世間に流布しているプリンセスのイメージといえ、やはり「元気ハツラツ・スカッとさわやか・ノドこしくっきり」というような、清涼飲料水広告の爽快感。確かに、それもある。おおいにある。でもね、プリンセスのキュートな純情っぽさを、見逃してはならない。そいつは、女臭い匂とは無縁な、女の心の意気なんだから。あの頼もしい姉御肌に見える、渡辺敦子の詞である。キッと前を見据えて、しなやかなベス・ラインをプレイするアツコも素敵だけれど、彼女が書いた詞が「KEEP ON…」と、「FLAME」である事実ドキッとさせられる。「FLAME」のSEXYな歌詞、マイナートーンのメロディライン。とても、「MY WILL」だけじゃ測りきれないプリンセスの手練をジックリ聞かせてくれた。このへんの手の内の鮮やかさを、ムクツケキ男バンドに求めようって土台ムリな相談だ。

彼女たちは女のコであることをとくにプラスに転化させていたんだな、と思った。

2年前の春。プリンセスは来る日も来る日もリハーサルに明け暮れていた。ハッキリ言って地味だった。うら若き女のコに似つかないルンルン（死語）気分はさておいて、日々スタジオ通い。「いつかはきつと……」という思いだけを支えに、テクを磨き、バンドを転がす……。とは言っても世間は春の風に誘われて、デートだ、花見だ、ピクニックだ、浮かれ気分。インドアでリハーサルを繰り返していると、逆に気分が滅入ってくる。「これじゃあいけな

い！」と一念発起。5人はある晴れた日の休日に、登山に出かけた。ディズニーランドでも多摩動物園でもなく、「登山」というところが生真面目な彼女たちらしい。リハーで鍛えた体力と精神力にモノを言わせ、頂上まで一気に登った。山の登った空気を胸一杯吸い込んで、ふと空を見上げたら、天がとつとも近くにあった。「神様は絶対いる。神様は天にいる」と、幼少時から信じていたカオリは、その天空にいるはずの神様にお祈りを捧げた。「プリンセス・プリンセスが成功しますように」と。

「それが、ちょうど2年前の4月17日だったんです——少し長めのMCに、静まり返った場内から、拍手が起った。カオリは恥ずかしそうだったけど、それ以上に嬉しそうな満足げな笑顔をみせた。

今はアメリカにいる女友だちのことを歌った「SHE」。ファースト・アルバム「TELEPORTATION」から、「想い出の隙間」どちらもギターの中加奈子の作詞によるセンチメンタルで胸が痛くなるようなハートイク・メモリー。そんな歌を作った本人は、切れ味のいいハードエッジなギター・ワークが光る強者。思い切りの良さはカッティングで証明済みのカナコ、今夜は一段と「ティナ・ターナーばり」のライオン・ヘアがキマってる。

ライブハウス時代からのファンは、初めてのホール・コンサートに少なからずとまどいがあったのか、メンバーとの距離感がうまく掴めないのか、中盤は割合おとなしかった。なんていうか、舞台上に初めて立つ子をドキドキしながら見守っている親族みたいなのだ。

その緊張感がほぐれたのは、プリンセスのデビュー・シングル「恋はバランス」から。ぶらぶらアイドルが歌ってもおかしくないアイラブ・ソングだなあと、思っ

たけれど、ガールズ・バンドだからできる華のあるポップ・チューンでいいもんだ。それに、彼女たちって、もしかして日本で初めてのアイドル・ガール・バンドかもしれない。この場合のアイドルは、世界のオモチャになることじゃなくて、「夢を与えられる存在」という意味で取り扱っていただきたい。夢を夢で終わらせないで、現実にはジタバタしながら、それでも5人は「組替えナシ」でやってきた。タフだけど、決して失うことはなかった「女のコのマインド」が、プリンセスの音楽の最大の強味じゃないかな？

と、そんなことを考えていたら、二度目のドクカン、発煙筒モクモク。ハードロック・アレンジの「GIRL'S NIGHT」で、ロックバンドたるパワーを見せつける。タテノリの「冗談じゃない」に至っては、女のノリの特有のにぎやかさとかはまじまじに爆発！ プリンセスの雑食性とゆーか、旺盛な音楽的食欲は、なんとも頼もしい限り。精神論を口実に型にはまったバンドには持ちえない奔放な意欲と好奇心。だからってわけじゃないだろうけど、ラストが「GO AWAY BOY」っていうのは、できすぎだよな。

良かった。アンコールで再度「19 GROWING UP」をやってくれた。おとなしそうに見えたのはウソで、コブシを振り上げる観客にもう不安の色はとうに消えていた。本当は「フタを開けてみなきゃ子想がつかない」と言っていた、彼女たちの方がドキドキもんの初めのお公であったはずだが、ノド元過ぎればナントヤラ。デカキ笑顔で「ヤッパ！」の表情、隠しきれない。

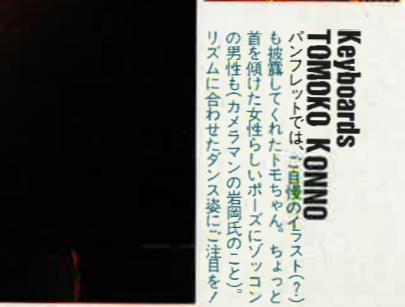
遅れてやって来たドジを思わず忘れてしまった能天気な気分を加味した上で、なおそれを上回る熱っぽいステージだったと、最後に言っておく。調子が良いのは生まれつきだけど、私はウソは嫌いだ。

here we are!

撮影●岩岡吾郎 文●佐野郷子

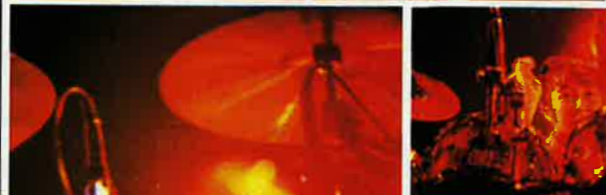
Guitar KANAKO NAKAYAMA

ウワッと、声をあげてしまったくらい、キメてくれました。カナちゃん。まさしくロックの落とし子。グイングインと弾きまくるギター・プレイとスタイルは、女の子の凄絶的なのです！



Keyboards TOMOKO KONNO

パンフレットでは「白黒のドレス」も披露してくれたトモちゃん。ちょっと首を傾げた女性らしいポニーテールの男性からカズマン(S. Man)のリスムに合わせたダンス姿に注目せよ！



Drums KYOKO TOMITA

愛称キョンちゃん。あの可愛らしい笑顔とボディからは想像つかないほどの、パワフル・ドラム。未体験の方、ステージの後方でスティックを操る仕草に目を向けてほしい。

Vocal & Guitar KAORI OKUI

うれしさがはじけとんで、カオリの頬にキョットとホッがでた。まさしくロック・ダイエンスの心にも楽しさが伝わってくる。19「growing up」は、キョットとホッがでた。



Bass ATSUKO WATANABE

ふだんの様子をみても、物静かです。メンバーを見守るアツコ。ベースの命。定まるリズム感はずっとの性格を表現す！ 今日はいよいよ一面を見せてくれた。